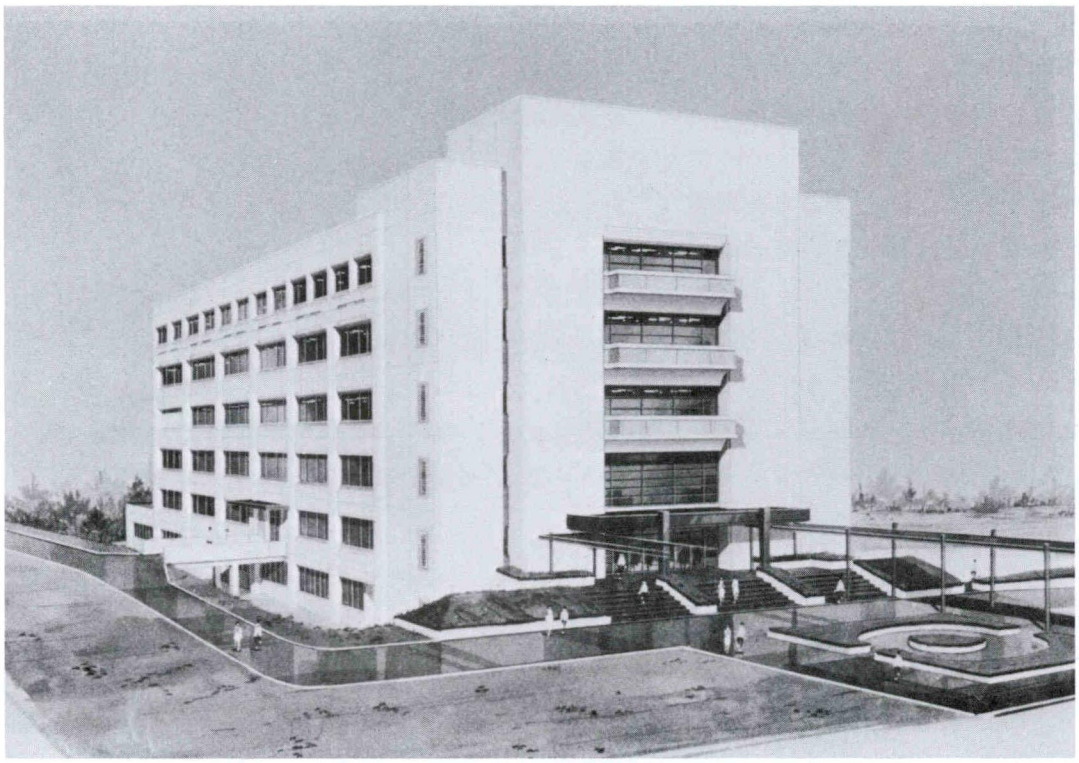
同窓会会報

福岡大学医学部同窓会

創刊号



医学情報センター全景

同窓会会報発刊にあたって

福岡大学医学部同窓会会長
山　崎　　節
（第1回生）

昭和53年、医学部の1回生が卒業して以来、卒業生有志による同窓会設立の動きがあり多少の曲折はありましたが、医学部創設10周年を機会として昭和57年7月に有信会の承認を得て「医学部同窓会」として発足いたしました。このたび医学部同窓会設立3周年を前にして、念願の同窓会会報を発刊することになりました。

同窓会の活動として現在行なっているものは、名簿の作製、臨床セミナーの開催、新会員への記念品贈呈、総会の開催などですが今回これに会報の発行も加わるわけです。

会報の目的として同窓会から役員への連絡や報告があります。現在の活動状況を理解していただき、更に積極的な参加をしていただきたいと考えております。またこのほか会員の動向も幅広くとりあげてゆきたいと思っております。大学における人事や学位取得のみならず、大学を離れて活躍している会員の近況も載せてゆきたいと思っております。加えてまだ実現されていませんが、各地に支部を作ることも計画しており、その活動状況も当然記面を飾ることとなると思います。

先にも書きましたように同窓会はもうすぐ3年目に入ります。会員数はすでに600名を越えておりますが、活動状況はまだ十分とはいえず、会員の皆さんには不満な面も多いと思います。今のところ自由に活動できる人も少なくしばらくは会員の皆さんに御迷惑をかけるかもしれませんが、今回の会報発刊をきっかけにして、更に同窓会の発展を期すつもりです。会員の皆さんの御支援をお願いしたいと思います。

医学部同窓会会報の発刊に寄せて

同窓会名誉会長
菊池昌弘
(医学部長)

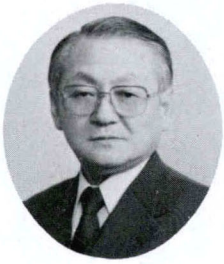
我が福岡大学医学部も昭和47年4月の設立以来すでに12年を経過し、本年3月迄に7回計718名の卒業生を社会に送り出し、その多くは、第一線の医師としてあるいは研究者として活躍していることは喜びにたえない。

この度、同窓会の発足3周年を記念して会報発行に漕ぎつけたことは、これら多くの卒業生の努力の賜物であろう。

多くの大学学部において、同窓会会報を発行している様であるが、その形式、内容は千差万別で、それぞれの大学の特徴が表われて興味深い。これからスタートする会報に、福岡大学医学部としてユニークなものが出来上るものと期待される。

設立以来の大学の歩みを振り返ってみるとこれまでに多くの試練があった。第一回生は147名が入学したが6年後に卒業した者は、わずか63名にすぎず、多くの者は留年を重ね、その後も同様の傾向がつづき福岡大学には留年生が多くなかなか進級出来ないという風評も立った。新設私立大学を出来るだけ立派なものという教員の努力のあらわれでもあろうが、はたしてこの様なことでよいのかという医学部教育についての深い反省により、大学として教育方法、システムについての検討を行い、今日では新しいカリキュラムが行われている。これと平行して学生側にあっても、自からの問題として、クラスメイトのみならず先輩、後輩との交流を深めることにより、福大医学部学生としての団結が形成されつつあり、その成果が徐々にではあるが表れている。このようなことも同窓会がまとまって、事業の1つとして同窓会会報発行に踏み切ったものであろう。

どうか立派な会報として伝統を築きあげるとともに同窓会を1つの基盤として、福大医学部卒業生が誇りをもって今後活躍することを大いに期待したい。



同窓会会報発刊を祝う

前同窓会名誉会長
西園　昌久
（教授）

先日、私が行きつけにしているカメラ店での話である。そこの主人が「先生たちは素晴らしい医者をつくっておられますね。」という。お世辞ばかりとは思えなかったので理由を尋ねてみたのである。「自分の友人がアメリカで飛行機事故にあって数ヶ月入院して、やっと帰国した。まだ本調子ではないので方々の病院を訪ねて診てもらったが良くならない。それで福岡市内のある病院に行ったら、若い先生だったけれど、治らない理由をレントゲン写真などをみせて説明してくれた。日本に帰ってこんな医者に会ったのははじめてだったので、どこの出身か尋ねたところ〈福岡大学〉という返事だった。ということで感心していた」と主人の答だった。また一つ、あるショッキングな話を聞いた。ある臨床研修病院の院長との会話でのときである。「この頃の若い医者は、おそろしい人がいますね。癌の患者に次ぎつぎに無差別に癌告知をするのです。呼んで注意したら科学的真実をまげてはいけないと抗弁されました。やむをえず大学に帰ってもらいました。」どこの出身か確かめるのは差控えたが、福岡大学ではないことはたしかであった。その院長が言外にほのめかしていたのは大学の教授たちはもっと医学教育に真剣になって欲しいということであったからである。

私どもは、福岡大学に結集したとき、社会のニーズに応える医学部をつくり、正しい医師づくりに努めようと社会に約束したものである。福岡大学に医学部ができたころ、わが国では医師不足が深刻であった。今日では将来の医師過剰が憂えられている。10年の時の流れのなかで、さまがわりしたのである。しかし、人間のすることはうつろいやすいのが本然の姿である。しかし、そうしたなかで、患者の傍らで心を砕く医師が求められるのはいつも世もかわらないであろう。

福岡大学医学部草創の頃、教師や学生の区別なく、立場は異なっても、お互いに額に汗して苦労したものである。世の中に期待され誇れる学風が確立されてきていると思う。そうしたなかで、少壮医師として成長した諸君が、福岡大学医学部同窓会会報を発刊されるという。同窓会と会員諸君の発展と健勝を祈ってやまない。

【第77回　医師国家試験】

去る、4月7日・8日に第77回医師国家試験が実施された。

本学は、昭和59年3月卒業者122名中99名合格、合格率81.1%、既卒業者を合わせると、158名中124名合格で、合格率78.5%であった。

《合格者名簿》

氏名	入局先	氏名	入局先
青木洋介	佐賀医大内科	栗栖景子	産婦人科
秋山太	外科第1	栗田隆志	内科第2
浅見昭彦	佐賀医大整形外科	黒木重晶	健康管理科
池田稔	泌尿器科	古賀学	内科第2
池永英恒	外科第2	小沢隆昭	熊大麻酔科
生駒季隆	鹿大精神科	近藤健司	内科第1
市原次郎	産婦人科	柴田郷子	皮膚科
伊東博巳	泌尿器科	柴田昌彦	小児科
稲津東彦	日大第1内科	清水正彦	
猪口寛	久留米大	下野健治	鹿大第1内科
植木光彦	内科第1	高橋亨	麻酔科
上田浩	久留米大第3内科	高浜純子	健康管理科
上田章雄	整形外科	竹下佐和	小児科
宇土巖	熊大泌尿器科	田代英一郎	内科第2
運天立馬	眼科	田中都美	内科第1
大河原泉	内科第1	田中豊子	佐賀医大整形外科
大塚吉郎	外科第1	田中裕子	耳鼻咽喉科
岡部廣直	九大第1内科	知念徹	健康管理科
小河原悟	内科第2	鶴田雅子	長崎大第1内科
小川健一	健康管理科	冨田昌良	外科第1
柏村直子	広島大内科	縄田純彦	山口大第1外科
加野草平	九大小児科	西山千枝子	小児科
上泉洋	北大第1外科	林登喜子	内科第2
岸重雄	健康管理科	原田啓之	産婦人科
木藤洋一	小児科	飯田雅知	精神神経科
金隆史	広島大原医研	平野正弘	佐賀医大
熊谷浩一郎	内科第2	福田敬子	九大眼科
蔵田善規	眼科	藤井温	広島大麻酔科

氏名	入局先	氏名	入局先
増田雄一	外科第2	星子浄水	内科第1
松嶋顕介	健康管理科	松村健	麻酔科
丸田嘉郎	脳神経外科	森尚一郎	内科第1
道永功	内科第2	秋吉恵介	内科第1
森下哲哉	九大産婦人科	向坂彰二郎	久留米大整形外科
安元和彦	耳鼻咽喉科	松岡嘉宣	内科第1
矢田公裕	小児科	安藤三英	九大救急部
柳宗賢	泌尿器科	荒木義雄	整形外科
柳田尚穂	精神神経科	小野研治	麻酔科
山下信哉	整形外科	石橋守典	内科第1
山田輝城	九大第2外科	大田守雄	外科第2
山之内良雄	内科第2	児玉芳知	宮崎医大眼科
山本正昭	脳神経外科	佐藤雅子	産婦人科
李吉福	外科第1	津田純郎	内科第1
安部博史	内科第1	豊村操	健康管理科
荒牧登美子	眼科	椎教次	泌尿器科
伊崎祐介	眼科	鈴木由美子	放射線科
蒲原光義	整形外科	中邑大献	内科第2
古藤剛	外科第1	溝口幹朗	病理部
澤田知宏	熊大第2内科	矢野淳	内科第2
時枝啓子	小児科	渡辺宏	鹿大
友安敏博	広島大第1外科	高嶋研介	整形外科
原直彦	九大呼吸器科	彌富泉	皮膚科研究生
原道也	整形外科	尾上敏博	整形外科
平田亮	内科第2	田野茂樹	眼科
平山祐義	整形外科	市岡敏幸	皮膚科
政所節夫	外科第2	岩永嘉明	産婦人科
諸江博子	眼科	牛嶋春生	産婦人科
山崎壮一	外科第1	中村英助	整形外科
横尾大輔	泌尿器科	水戸正樹	精神神経科
吉村豊暢	整形外科	森本健司	健康管理科
熊手茂彦	脳神経外科	友清哲	整形外科
小泉明	九大小児科	白水茂輝	内科第1
下永吉耕一	整形外科	清永勉	久留米大外科第2
新保友貴	精神神経科		

【医局だより】

〈内科学第一〉
奥村恂教授、西丸雄也・浅野喬・八尾恒良助教授。
医局員103名中、本学出身者は65名。

〈内科学第二〉
荒川規矩男教授、内藤説也・吉田稔・龍井昌英助教授。
医局員76名中、本学出身者は39名。

〈外科学第一〉
志村秀彦教授、山本博・池田靖洋助教授。
医局員56名中、本学出身者は40名。

〈外科学第二〉
犬塚貞光教授、
児玉好史・白日高歩助教授。
医局員34名中、本学出身者は23名。

〈小児科学〉
小田禎一教授、満留昭久・津留徳助教授。
医局員49名中、本学出身者は33名。

〈産婦人科学〉
白川光一教授、金岡毅助教授。
医局員29名中、本学出身者は21名。

〈整形外科学〉
高岸直人教授、松崎昭夫助教授。
医局員47名中、本学出身者は28名。

〈耳鼻咽喉科学〉
曽田豊二教授、調重昭助教授。
医局員34名中、本学出身者は14名。

〈眼科学〉
大島健司教授、百枝榮助教授。
医局員20名中、本学出身者は11名。

〈脳神経外科学〉
朝長正道教授、福島武雄助教授。
医局員18名中、本学出身者は9名。

〈泌尿器科学〉
坂本公孝教授。
有吉朝美・大島一寛助教授。
医局員15名中、本学出身者は9名。

〈麻酔科学〉
檀健二郎教授、田中経一助教授。
医局員23名中、本学出身者は18名。

〈放射線科学〉
小野庸教授、
奥寺利男・後藤勝也助教授。
医局員37名中、本学出身者は13名。

〈精神神経科学〉
西園昌久教授、牛島定信・堤啓助教授。
医局員39名中、本学出身者は15名。

〈健康管理科学〉
井上幹夫教授、
守田則一・鈴木九五・本岡健一助教授。
医局員28名中、本学出身者は18名。

〈病理学第一〉
菊池昌弘教授、岩崎宏・栄本忠昭助教授。
医局員19名中、本学出身者は9名。

〈公衆衛生学〉
重松峻夫教授。
医局員4名中、本学出身者は2名。

〈衛生学〉
江崎廣次教授。
医局員8名中、本学出身者は3名。

（昭和59年5月現在の各医局の状況を掲載しました。詳細な医局紹介は次号より連載の予定です。（なお、未掲載の医局については第2号に掲載したいと考えています。）

【お知らせ】

〈第３回　福岡大学医学部　同窓会総会開催〉

今年も例年通り、７月の第１土曜日に同総会総会を開催いたします。前回まではやや参加者が少なかったようですが、会員相互の交流のために奮って御参加下さい。

日時　７月７日（土曜日）
　受付　　午後５時より
　総会　　午後５時30分より
　懇親会　午後６時より
会場　ガーデンパレス
　　（℡ 713－1112番）
会費　5,000円

〈第２回臨床ゼミナール教室〉

テーマ　『胸痛』
日　時　７月13日㈮午後６時より
会　場　臨床大講堂（予定）

昨年の第１回「腹痛」に引き続き、第２回ゼミナール「胸痛」を開催します。

〈会費納入のお願い〉

昭和59年度同窓会費（5,000円）を未納入の会員の皆様は、６月末日までに下記口座にお振込み下さい。

福岡銀行　福岡大学病院出張所
普通預金口座　No. 18937
　福岡大学医学部同窓会
　　会長　山崎　　節

〈変更通知はお忘れなく〉

転勤、留学、結婚などで、住所、氏名や勤務先を変更される会員が多いと思います。ぜひ、同窓会宛に御一報下さい。会員への通知、名簿作成に際して消息を追うことは非常に困難なのです。なお、通知用のハガキがとじ込んであります。御利用下さい。

編　集　後　記

今回の会報は、念願の同窓会の発足以来３年目にしての発刊です。この会報が会員相互の交流に役立ち、また、会員の皆様が同窓会の活動をご理解していただけるものと信じています。今後ますます、編集委員一同努力していくつもりです。

次号からは、内容の充実のために、会員諸氏の御投稿をお願いします。

投稿先……〒814-01　福岡市城南区七隈７丁目45番１号
　　福岡大学医学部同窓会　宛て
　　編集委員一同